神聖かまってちゃんとヤンキー・オタク

―――世界を変えるのはオタクだ

　人はヤンキーとオタクに分けられる。
　音楽雑誌のこの小さきコーナーを読むものはおそらく、オタクだろう。ヤンキーは読まない。
　オタクとヤンキーは分かり合えない。一緒に何かをすることはできる。でも、魂のありどころとする場所がちがう。

　一見、ヤンキーが一匹狼で、オタクが人とつるむと思われがちだ。しかし、よくよく考えてみると、ヤンキーこそ人とつるみ、オタクこそ独りでいる狂戦士だ。

　学校生活を思い出してみるとわかりやすい。ヤンキーは規則に、規範となる先生に反抗する。もんだいは、その後、仲間と集まり「いまの見た？ ウエーイ！」とやっていることだ。人と固ま

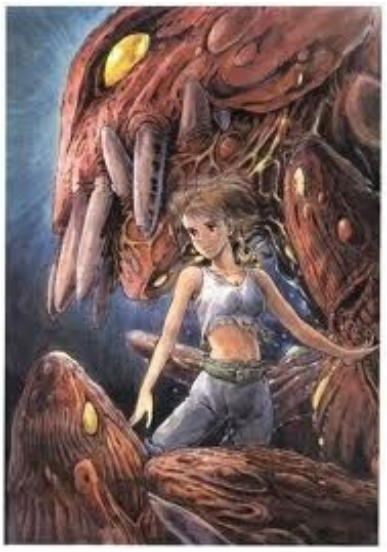
っているのだ。「学校の規律は気にくわないんだ」と突っぱねるものの、仲間とちゃっかり徒党を組んでいる。
　たとえば、学校で規律が嫌でそとに出たヤンキーが暴走族という集団に入って規律に縛られようとする謎の行為にそれをみることができる。ぜんぜんカッコよくない。

　オタクをみてみよう。
　オタクは自分の好きなものについて熱い。たとえ、集団において孤立したとしてもそれをけっして離さない。無事に集団生活を営むものの、心の奥底ではコシタンタンと自分のアイデンティティを忍ばせている。

　かれらは独りでもやりたいことを実行する。テロリストに似ている。「仲間？ああ、でも独りでもやるぜ？」という意気込みだ。たとえば、宮崎駿をみてみる。スタジオジブリというアニメスタジオをもっているが、それは宮崎駿自身の自我をアニメに映すためのただの手段であって、ジブリ以外にじぶんの創作場所があればいつでもそこを辞める気だ。

　なぜなら、宮崎駿は弟子を作っていないからだ。それっぽい人間はいままでいたが、宮崎の後継者っぽい人間はいるが、やはりパっと思い浮かばない。スタジオジブリという集団の規律や維持を考えているなら、かならず人間を育てているはずだ。一瞬、アニメ塾を開いたことがあるようだが、一期生だけで終わってしまったらしい。(交響詩篇エウレカセブンの演出、忘年のザムドの監督をした宮地昌幸はその塾生である)。

　制作スタジオのスタッフのことを考えているのはプロデューサーの鈴木敏夫だろう。たとえば、『風の谷のナウシカ』の劇場版のラストではナウシカはオウムの体当たりで死ぬシナリオだったという。それをみた鈴木敏夫がラストを変更させたのだ。同じように、最新作の『風立ちぬ』もラストのセリフは鈴木敏夫の提案によって変更されている。それは興行を鈴木が考えているからだろう。



　作家性を爆発させソルジャーのように独りで切り込んでいくオタクの宮崎と、興業を考えて仲間であるスタッフの生活のめんどうをみるヤンキーの鈴木。
　この二人のバランスがあるからジブリは興行的に成功しているのだろう。

　ヤンキーとオタクを見た目で判断するのはじつはむつかしい。
　たとえば、ニコニコ生放送で放送する人たちをみるとアニメやゲームが好きというオタク的な趣味をもっているものの、放送でハツラツとしゃべっている様子をみていると「オタクってこうだっけ？」というようなコミュニケーション能力を発揮している。つまりかれらはヤンキーなのだ。

　たとえば、サッカー日本代表選手の本田圭佑はオタクだ。
　身なりは完璧にヤンキーであるが。なぜなら、ワールドカップ日本代表が揃う会見でかれは和気あいあいとしてるメンバーをよそに、もっと自分たちはきびしく行くべきと鼓舞している。マスメディアからの情報でしかないがかれのイメージはストイック。周りの人間に気を使って控えるよりも自分が切り込んでいくんだという意志が感じられる。非常にオタク的だ。

　このように、けっして身なりや趣味・趣向でヤンキーとオタクは分けられるものではない。精神性が重要なのだ。

　あるインタビューで怒髪天のボーカル増子は「ロックはテロだよ、テロ」といっているように、ロックミュージシャンは孤高でなにかをやる気負いがある。かれらはオタク的なのだ。

神聖かまってちゃんのの子はどうかというと間違いなくオタクだ。それは、ソロでＣＤを出したことに象徴されている。神聖かまってちゃんで演奏される曲はすべての子が作っている。の子は趣味が音楽制作とまで言い切っていることから分かるように、音楽には人一倍こだわっている。自分の作った楽曲だからなおさらだ。

の子はバンドで演奏したときより、デモが一番好きだと明言している。つまり、の子がソロとしてやりたくなったのは、自分の楽曲が自分から離れてメンバーの手に渡ることで自分の楽曲イメージと演奏したときの曲が解離していくことにフラストレーションが溜まっていたからだろう。

それが起こるのは楽曲をオタク的な気質で作っているからだ。これがたとえば、楽曲はメンバーのためという思想が入っていたら、バンドで何年も前から演奏されている楽曲をわざわざ楽器演奏のプロを雇って演奏させる意味がまったくない。
周りのためではなく、自分自身のために突き進もうとするさまがオタク的である。

われわれの住む世界は理不尽だ。
人とつるむヤンキーにとって生きやすい社会だ。というか、人とつるむほうが楽というのは当たり前だ。集団に属して精神をゆだねていたほうが自分の頭で考えないでいいのだから。

残念ながら、われわれはオタクだ。ヤンキーのように「ウェーイ」とやれない。小っ恥ずかしいのだ。やりたい気持ちはあるが、できない。そして誤解されながらわたしたちは生きていく。

反逆心も反抗心もヤンキーたちと同じように、いやそれ以上にあるが、それすら出してしまうと社会生活ができなくなる。ほんとうに、ある分野に先鋭特化したオタクなら社会と対峙しながら自分というものを出すことができる。

しかし、そんな秀でた人間ばかりではない。フツーもしくはフツー以下なのにオタク気質な人間もいる。そういう者にはとてつもない負荷がかかってしまうのがいまの社会だ。敏感に「これはないだろう」と気づいてしまうがそれをグイと変えてしまう力を持っていないから辛い。

飼い殺しである。オオカミがポツンとライオンの群れに放り込まれているような気分である（闇のパープルアイ的な！）。むつかしい。

わたしたちには新しい生き方が必要だ。モデルとなる人物がいればいい。それをロマンにわたしたちは生きいく。

そこで、の子の生き様が重要になってくる。の子の歩むさまはかれに同調するオタクのモデルとなっている。かれがどう道を切り裂いて、どう社会と折り合いをつけていくのか、それをわたしたちはみている。

たとえば、神聖かまってちゃんはネット配信で多くの動画を残しているのにもかかわらず、いまDVDで映像集を出そうとしている。それは一匹狼であるオタクの子が社会にどう切り込んでどう折り合いをつけているかを考察できる出来事だ。彼らのアイデンティティであっただろう映像を無料で提供するというものを、今度は既存の音楽業界のルールのように映像を有料で売るのだ。

これはどう考えればいいのだろう。

蛇は脱皮するとき、涙を流すという。神聖かまってちゃんの新たなその動きは蛇のような悲観的なものではなくポジティブだ。なぜなら、今年のかれらは元旦に今年は攻めるという宣言をしているからだ。

かれらは変わろうとしていた。そもそもの子たちがインターネットに来たのは攻めであろうとするロックバンドの姿勢だった。次にそれをひっくり返す。インターネットをよりしろとして、次は既存の音楽流通に攻め込むのだ。

ロックバンドがロックたらしめているのはサウンドでもルックスでもなくアティテュードつまり「姿勢」である。

オタクがキレるとどうなるか、秩序を重んじるヤンキーたちに思い知らせてやってくれ神聖かまってちゃんよ。

うおお

奥付

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ